

日刊レーニン創刊号（1917年1月22日・露歴9日）

100年前の本日、1月22日のレーニンはスイス、チューリッヒ国民会館で、青年に1905年革命の意義と総括について演説。「われわれ老人は、来るべきろう革命の日までおそらく生き長らえないだろう」と演説を締めくくった。

しかし、この時まだレーニンは知らない。すでに偉大なプロレタリア革命の序曲は始まっていた。

日刊レーニン2号（1月25日・露歴12日）

100年前のレーニン。亡命生活の中、本日も日課になっているスイス・チューリッヒの図書館に向かう。朝は9時までに図書館にいき、12時まですわりどうし。ちょうど12時10分に帰宅して、昼食後はまた図書館に出かけて6時まですわりとおした。

今、特に研究しているのはマルクスの国家学説の問題。この研究の抜粋ノートは、あの有名な『国家と革命』の元になるものだ。

革命的理論なくして革命なし。レーニンは図書館で来るべき革命に備えて日々爪を研ぐ。

日刊レーニン3号（1月27日・露歴14日）

1917年の本日のレーニン。レーニンは昨日から『H・グロイリヒによる祖国擁護の擁護についての一二の短いテーゼ』を執筆中。

グロイリヒはスイスの社会民主主義者であり、第二インターナショナルの極右翼だ。

レーニンらは第二インターの崩壊から15年ツィンメルワイト会議、16年4月のキンターン会議で、国際主義者の結集と強化、新たなインターナショナルを目指してきた。

ツィンメルワルト左派の勢力・組織拡大が一切だ。レーニンは社会排外主義者への批判を緩めない。

日刊レーニン4号（1月31日・露歴18日）

1月31日本日のレーニン。今日もいつもと変わらず、スイス・チューリッヒの図書館に通う。

今日はロシアで、『ソツィアルデーモクラート』（ロシア社会民主労働党の中央機関紙）の58号が発行。レーニンの論文である『世界政治の転換』も掲載してある。レーニンは論文で、帝国主義戦争に対して、人民をなだめすかす坊主、美辞麗句のブルジョア弁護士の役割をするカウツキーに徹底的な批判を加える。

機関紙への大衆の反応はどうか？レーニン、スイスにいても意識は常にロシアにある。

おことわり：2月からは露歴に合わせて発刊日します。

日刊レーニン5号（2月3日）

1917年の本日(2月3日)のレーニン。レーニンは、図書館から帰ると、たいてい党的な指示、指導に関する通信、また私信などを行う。昨日は、ロシア内で活動する女性ボリシェビキであるイネッサ、今日は、国際主義者のカ・ベ・ラディックに手紙を送った。内容は、カウツキーら社会排外主義者に対する対決する宣伝・扇動と行動についてだ。一歩ずつだが、着実に前進するレーニン。激動の2月が始まった。

日刊レーニン6号(2月7日)

100年前、1917年の本日(2月7日)のレーニン。レーニンは頭が痛い。昨日は、チューリヒのスイス社会民主党の総会があった。レーニンは、スイスの青年、労働者と接近、組織するためにスイス社会民主党にも加盟している。委員会の組織変更の選挙ではボリシェビキのブロンスキーが選出される。しかしこれに、社会愛国主義者が退場し、ツィンメルヴァルト左派はこれに屈服。ツィンメルバルト左派は「沼地」に行くのか？レーニン頭が痛い！

日刊レーニン7号(2月12日)

100年前の1917年2月12日のレーニン。今日も学習、通信と国際主義者の組織化に費やす。

一方ロシアでは、モスクワの電気工業ディモナ工場は原料や燃料不足のため昨日から全面運転休止。政府の保護を受けていたにも関わらずだ。また、食糧問題は深刻だ。飢餓線ギリギリであり、これらはロシアの労働者階級の現状を示している。1月9日にはペトログラードの15万人ストが起きている。

さらに今日12日は、ツァー政府によって戦時工場委員会(戦時動員体制のための資本家、労働者代表、広範な社会団体など)の自由主義的な中心が弾圧・逮捕された。そして…。

日刊レーニン8号(2月14日)

100年前の1917年2月14日のレーニン。今日はロシアにいるイネッサに手紙を送る。スイス社会民主党内に左派を結成するためだ。

一方ロシアでは、国会の開会日でもあったこの日、12日に逮捕された労働者代表の呼びかけに応え、10万人以上の労働者がストライキに突入。一点の火花がペとログラードの町に飛び火していく。

日刊レーニン9号(2月18日)

1917年の本日(2月18日)のロシア。国会開催日の2月14日以後、ストライキとデモが拡大している。その勢いは止まることを知らない。

そして3万人が働く金属工場プチロフ工場でも18日に一職場でストライキが始まった。プチロフ工場は官営工場であり、大砲・砲弾、鉄道・車両関係、溶鉱・鑄造関係を含む巨大な工場だ。軍事・重工業として決定的な職場だ。労働者の闘いが、資本主義生産関係を飲み込み始めた。

日刊レーニン10号（2月21日）

100年前の1917年の本日（2月21日）。21日、プチロフ工場で始まった一部門でのストライキは、全職場に拡大した。多くの労働者が街頭へ飛び出している。19日からはペトログラードでパンが不足し始めた。火を焚くための焚き木もない。極寒のロシアでは致命的だ。戦争は続き、食料もない。労働者の怒りは臨界に達していた。

日刊レーニン11号（2月23日）

2月23日、ついに、ロシアの女性労働者の怒りが爆発した。国際婦人デーの本日、ポリシェビキのヴィボルグ地区委員会とペテルブルグ委員会は労働者の屋内集会を開く予定であった。しかし、パンもなければ焚き木もない。ペテルブルグの女性労働者は自主的に次々にストライキに突入した。さらに、ポリシェビキにスト支援を要請。夕方には、ヴィボルグ地区のゼネストに発展。「パンをよこせ！」と叫ぶ14万人の都心デモが行われた。

夜、ポリシェビキのペテルブルグ委員会とヴィボルグ地区委員会は緊急の合同会議を開催。①兵士の間で工作を強める②武器を手に入れる③ストライキを続ける④24日にネフスキー・デモを行う⑤メンバーは工場に出動し、労働者をデモに連れ出す⑥スローガンを「専制打倒」「戦争反対」とする⑦集会の目標はカザン聖堂とする事を決定。

労働者のストは、さらなるストを生む。怒りは解き放たれていく。ロシア革命が始まった！

日刊レーニン12号（2月25日）

「何もかもが腐れきった、迷い道から、忘れられた世界から、若いロシアが、進行している！」新パルヴィエネン工場で、誰かが演説した。

ポリシェビキのデモ方針は大衆を獲得していた。今日は、24万人～30万がストライキに入り、新聞も、電車もストップした。昨日からデモは「専制打倒！」「戦争反対」のスローガンが全面的に押し出された。各地でデモ隊の発砲や警官の一斉射撃、軍隊の出動など、衝突が起き、数人の死者もでていく。

だが軍隊の亀裂も始まっている。カーザクは民衆への共感を示し、デモ隊への発砲を要請した警察署長をサーベルで斬り殺したりした。古い秩序の崩壊、あふれる労働者のデモ・ストライキともに新しいロシアが始まっている。

\*写真：2月23日の女性労働者のデモ。

日刊レーニン 13 号（2月 27 日）

27 日、ビョルイニ連隊の反乱を合図に、首都守備隊が総反乱を開始した！反乱した第 4 連隊は、監獄を強襲。政治犯を釈放した。

戦時工業委員会の労働者グループやメンシェビキやボルシェビキなどが次々と釈放されていく。未決勾留で監獄に入っていたポリシェビキの B・H・ザレースキイは解放され「革命だ！」とすぐに労働者街へ駆けつける。途中、同じく解放された戦時工業委員会の労働者グループのグヴォーズジェフがと出会う。「どこへ？」とザレースキイは質問する。「国会へだ」と彼は答えた。ポリシェビキと祖国防衛派とは、最初の行動から異なる道を歩んでいた。

27 日の国会内では、メンシェビキ、祖国擁護派が集まり、ソビエト臨時執行委員会を設立。夜はペトログラード労兵ソビエト設立会議がおこなれた。ポリシェビキは自ら権力を掌握することについてはまだ無自覚だった。

日刊レーニン 14 号（3月 1 日）

「命令第一号」をペトログラート労兵ソビエトを発した！ペトログラート守備軍に対して「国会軍事委員会の命令は、それが労兵ソヴィエトの命令と決定に反しないかぎり遂行すべきである」という命令だ。それは続く戦争、労働者への弾圧を強制される見事に兵士の思いに合致した。ここに国会軍事委員会と将校の支配権は崩壊した。2月革命が確定した瞬間だった。2月革命は確かに労働者、兵士が起こした革命だった。それはソビエトの圧倒的権威を作り出した。

しかし、ペトログラート・ソヴィエトを指導するメンシェヴィキは、ロシアが当面する革命はブルジョワ革命であり、権力はブルジョワジーが握るべきであるという認識から、臨時政府をブルジョワ政府と見なして支持する方針を示した。

それは初めから労働者の思いとは乖離していた。革命に沸くロシア。さらなる激動が続く！

\*写真：2月革命にてツアーリの警察隊を攻撃する革命部隊

日刊レーニン 15 号（3月 2 日）

3月 2 日、レーニンは簡単な昼食をすませて、いつものように図書館にもどるしたくをしていた。そこに、ポーランド人のブロンスキーが嵐のように飛び込んできた。彼女は、取り乱し腕を振り回しながら叫んだ「あれっ！なにも知らないんですか。ロシアで革命がおこりましたよ」彼女は、ニュースをふれまわりにすぐに出ていった。

レーニンはなにも考えられない。実感もわからない。真っ青になって、湖のところに飛び出していった。そこには特別の広告板がある。ペトログラートでなにか大事件が起こったことは確かだ。しかし、その意味と広がりをつかむことはできない。レーニンはジ

ノヴィエフと共に情報を求め、街路を何時間もふらつき、また、新聞社の前に新しい電文が張り出されるのを待った。もはや疑う余地はなかった。レーニンは 1905 年の悔しさを思いだした。自ら帰って革命を導かねば。レーニンは考える。ロシアへの帰国へ…なにをなすべきか？

日刊レーニン 16 号（3月5日）

ペトログラート労兵ソビエト執行委員会は、「獲得された勝利は革命的闘争における労働者階級の地位を十分に保障している」「ペトログラートの労働者は、3月5日を期して工場に復帰すべきである」として、ストライキ、街頭デモを闘い抜いていた労働者に声明を発した。

3月2日には、臨時政府が設立した。自称「社会主義者」をケレンスキー法相を除けば、自由主義的資本家であり、土地所有者で構成され、リヴォーフを首相兼内相とするブルジョア政府だった。この臨時政府も労兵ソビエトの承認・支持がなければ組閣すらすることもできなかった。階級間の力関係は明白だ。しかし、メンシェビキ・エスエルが支配するペトログラート労兵ソビエト執行委員会は、2段階革命を綱領とし、「ブルジョア革命を徹底」する必要から、臨時政府に対して戦争、土地問題、8時間労働制の問題にはなにも触れなかった。それは、即座に臨時政府との衝突になるからだ。

そして、同時にこの日『プラウダ』が再刊された。『プラウダ』は即座に、労働者・労働組合と結びつきを回復していく。臨時政府、労兵ソビエト執行委員会（メンシェビキ・エスエル）、ボルシェビキの労働者・兵士・ソビエトの権力支配をめぐる決戦に入っていく。

写真：1917年3月17日の『プラウダ』。ポーランド独立宣言を報じる。

日刊レーニン 17 号（3月6日）

100年前の今日のレーニン。ロシアにむかって出発するボルシェビキたちへ電報を出した。

「われわれの戦術はつぎのとおりである。新政府をまったく信用せず、いっさい支持しない。とくにケレンスキーに疑いを持つ。プロレタリアートの武装が唯一の保障。ペトログラート市議会の選挙の即時施行。他党との接触はいっさい不可。このよしペトログラートへ打電せよ。」

情報が圧倒的に不足している。ロシア2月革命が起き国外にいた様々な同志がロシアを目指している。自分はまだ帰国への見通しさえない。レーニンは焦る！

日刊レーニン 18 号（3月8日）

100年前の本日のレーニン。レーニンはロシア国内の中央委員会に最初の手紙を送る。

いわゆる「遠方からの手紙」だ。

現在は過渡！レーニンは今回の革命を最初の革命の最初の段階だと捉えた。「唯一の保障は、プロレタリアートの武装」「労働者は、ブルジョア的政治屋の詐欺にたいして人民の眼を開かせ、言葉を信じないようにし、自分の力、自分の組織、自分の団結、自分の武装だけにたよるように、人民をおしえなければならない」「社会主義を目指して進むことができるし、また進むだろう。この社会主義のみが、戦争で疲れはてた諸国の人民に平和とパンと自由をあたえるだろう。」

レーニンは思う。今回の革命は確かにブルジョア革命だ。しかし今必要なのはブルジョア革命の完成ではなく社会主義革命が必要だ！

\*ポスター：(レーニンの過去、現在、未来)

日刊レーニン 19号 (3月12日)

3月12日、流刑地からスターリン、カーメネフがペトログラートに帰国した。

中央委員会ロシアビューロと『プラウダ』編集局は彼らのヘゲモニーの下に再編された。

2月革命からこれまでを率いてきたのは、シリャープニコフ、モロトフ、ザルツキーら20代～30代の比較的若い党员だった。2月革命は後にトロツキーが言うように「指導者たちは運動の後をもたもたと歩いていた」言われているが、ペテルブルク委員会やヴィボルグ地区委員会などの労働者党员が先頭に立ち、ストライキやデモ、兵士獲得の闘いを推進し、革命的な下士官・兵士の反乱のイニシアティブをとった。予想をこえる革命的現実と苦闘し抜いて闘った指導部はなんとか革命に食らいついていたが、権力を取ることへの執念はまだ決定的に無自覚だった。

スターリンとカーメネフの帰国は、さらに党と階級に混乱をもたらしていく。

\*写真：青年時のトロツキー

日刊レーニン 20号 (3月18日)

100年前の本日のレーニン。レーニン、ついにロシア帰国へのめどがつく。レーニンは『ロシア社会民主労働党在外団の決定』を書きあげた。当初は、チャーター機を借りての飛行機でロシアに帰国する案や、レーニンそっくりのスイス人(しかもレーニンはスイス語をしゃべれないので、寡黙なスイス人)を探してもらい、偽造したパスポートでの帰国するなどの案もあった。とにかくあらゆる案を検討した。『決定』では、スイスの同志ロベルト・グリムの提案による、ドイツを通過しての帰国案を提起した。この案はドイツ政府当局との交渉、ロシアでの抑留されているドイツ人との交換計画などまだ多くの問題、解決すべき課題がある。しかも交渉がうまくまとまっても、途中でのドイツ政府の裏切り、レーニンたちの逮捕、処刑もありうる。危険はある。しかし、レーニンは躊躇はしなかった。

ロシア革命は刻一刻と進んでいる。昨日（17日）は、カーメネフに怒りの手紙を出した。14日の『プラウダ』は、臨時政府に「断固たる支持」を表明した。また、ペトログラート労兵ソビエト総会で提起された「民主講和」「革命的祖国防衛主義」を内容とする「全世界の諸国民へ」という欺瞞的アピール（3月14日宣言）を「熱烈に歓迎」していた。ボルシェビキ指導部の右翼旋回は明確だった。事実、ロシア国内では、シリャープニコフは、こうした編集局の交代と右翼的路線転換を「編集局革命」と批判し、地区党と労働者党员も3人（カーメネフ、スターリン、ムラーノフ）の除名を要求していた。

22日には、チューリヒ亡命者の帰国の手はずを整える会議がおこなわれる。

日刊レーニン 21号（3月22日）

100年前の本日のレーニン。レーニンは、チューリヒで、亡命者のロシア帰国の手はずをととのえる問題についての会議に出席していた。この間、ロシアへの帰国に関するドイツ大使館との交渉はグリムからスイス社会民主党のプラッテンが引き継いだ。グリムは、不当にドイツ大使館との交渉を長引かせていたためだ。

レーニンはグリムに抗議し、交渉人をプラッテンに引き継いでもらっていた。

プラッテンは、同日の22日、ドイツ大使館に交渉して旅程の具体案を提案していた。提案は、電車を使ったドイツ経由での帰国であり、その条件は①ロシアに帰国するまで途中で車外にでることはできない。②車内では治外法権が認められる。③ドイツ入国、出国のいずれにあたって、旅券、人員の点検は一切行わない④ドイツ国内の通過はロシアに抑留される民間ドイツ人、または戦争捕虜との交換を建前にすること⑤帰国団は④の実現のために、ロシアの労働階級に運動することを誓う。⑥帰国はできるだけ早くすませる。そして、⑦電車にはドイツ官憲も乗り込むが、その接触は、プラッテン一人でおこない、彼の許可がなければ、なんびとも車内に入ることができない。というものだった。

一刻でも早いロシアへの帰国。今、レーニンはできることは、ドイツ大使館からの返答を待つことであり、唯一待つことしかできなかった。

日刊レーニン 22号（3月25日）

100年前の本日のレーニン。「ドイツ政府が条件を飲んだ！」ロシア帰国へのドイツ通過に関して交渉していたプラッテンがレーニンに伝えた。

もうレーニンはじっとしていられなかった。「次の汽車で、すぐにベルンに行こう」とレーニンはクループスカヤに言う。クループスカヤは呆れて言う。「一人で行ってちょうだい。私は明日行きます」。次の汽車は2時間後だった。「いや、一緒に行くんだ」レーニンは頑として聞かない。本当に必要最低限なものだけを準備して出発することになった。

待ちに待った帰国だ！ レーニンの気持ちははやる。しかし、その日は復活祭だった。ペルンへの旅行は無慈悲に遅らされた。

日刊レーニン 23 号（3月 27 日）

100 年前の本日のレーニン。午前 3 時 10 分。ついにロシア行きの電車が出発する。出発前は、駅の近くで亡命ロシア人から「裏切り者」「売国奴」「ドイツの回し者！…」と罵られた。レーニンはまったく気にしない。

昨晩は、別れの晩餐会を開いてきた。レーニンはスイス同志に深い感謝を示して、スイス労働者に書簡を読み上げた。「ロシアプロレタリアートはある期間だけ、全世界における革命プロレタリアートの前衛をなした。われわれの革命は社会主義革命のプロローグであり、ささやかな第一歩である…ヨーロッパにはじまるプロレタリア革命万歳！」。まさに、ロシアの革命は世界革命の序曲だ。レーニン、封印列車でロシアに向かう！

\*写真：封印電車のレーニン。

日刊レーニン 24 号（3月 30 日）

100 年前の本日のレーニン。列車はロシアに向かう。レーニンは昨日からずっと列車の中で、『革命におけるプロレタリアートの諸任務についてのテーゼ』（『4月テーゼ』）を書いていた。明日は、ストックホルムで一日滞在する予定だ。順調に進めば、4月3日にはロシアに到着する。レーニンは一心不乱に書き続ける。

日刊レーニン 25 号（4月 3 日）

100 年前の本日のレーニン。

レーニンの乗った列車はついにロシア国内に入った。国境近くの駅のホームには 50 人ぐらいの団が待っていた。レーニンの妹のマリアやコロantai もいる。事前に連絡し、呼び寄せたカーメネスも到着していた。

レーニンは駅に着くとコロantai から花をうけとり抱擁する。レーニンは次々に歓迎をうけた。レーニンはカーメネフと再び車内に入る。レーニンは席につくなり、カーメネフを批判した。「諸君の『プラウダ』は何が書いてあるんだ！…君たちをひどく罵ったものだ」。列車がめざすは革命のペテルブルクだ。

一方ロシアでは、レーニンの帰還に合わせて、ボルシェビキ・ペトログラート委員会が、軍組織の支援を得てレーニンの歓迎式のため数千人の労働者と兵士を動員していた。ロシアでは、大物の亡命者、流刑者が帰ってくると凱旋将軍のように迎えることが習慣になっており、なんとしても華々しくすることが必要だった。友好的な装甲師団は手持ちの装甲車も動員してくれた。ソビエトの執行委員会はしぶしぶだがチヘイゼ議長などを派遣することを決めた。ペテログラードのフィンランド駅ではレーニンの帰還を待ち

わびて人だかりができていた。

レーニン一行がフィンランド駅に着いたときはもう夜だった。レーニンが機関車からコロンタイやシリャープニコフに支えられて出てきた。

号令一下兵士の列は捧げ銃をする。沈黙。楽隊は『マルセイエーズ』の一節を吹きまくる。レーニンは駅の貴賓室に案内されて入る。そこにはチヘイゼが待っていた。チヘイゼは第四帝国議会のころ、メンシェビキの議員団長としてさんざん渡りあった顔としてレーニンは思い出した。チヘイゼは歓迎の挨拶を述べるがレーニンはまったく聞かずこう答えた。「親愛なる同志諸君…諸君が成し遂げたロシア革命は、新しい時代を切り開いた。全世界の社会主義革命万歳！…」。

レーニンは、チヘイゼに背を向けて、水兵と労働者に、祖国防衛に背を向けて国際革命に、臨時政府に背を向けてリープクネヒトに支援を訴えたが、駅では自分のその後のささやかなりハースルをおこなったにすぎなかった。

レーニンは凱旋式と装甲車に乗ってのデモを終え、ボルシェビキ本部があるクシェシンスカヤ宮殿に入った。ペトログラート委員会へのレーニンの挨拶は 2 時間にわたった。

その会議に出席したスハーノフ（中間＝国際右派）はその感想を書き記している。「私は、その雷鳴のような演説を忘れられない。たまたま紛れ込んだ異端者の私だけでなく、正統派もみなそれに震え上がり仰天した。そのようなものを予期した者はだれひとりいないと私は主張する。」

それは、プロレタリア社会主義革命論であり、ボルシェビキ党員の理解を大きく超えていた！

日刊レーニン 26 号（4 月 4 日）

100 年前の本日のレーニン。レーニンはタヴリーダ宮殿に向かう。地方のソビエトから労兵ソビエト全ロシア大会に集まったボルシェビキの仲間がレーニンの話しをぜひ聞きたいと言うのだ。レーニンは潔く引き受けた。

レーニンは労兵ソビエト全ロシア大会に参加したボルシェビキの集会で『革命的プロレタリアートの任務についてのテーゼ』（4 月テーゼ）を読み上げた。

4 月テーゼは、カーメネフ、スターリンよりもレーニンに近かった 3 月初めのボルシェビキ中央委員会ロシアビューローの路線とも異なっていた。この時の彼らは、労兵ソビエトの成立に一定は対処しつつも、労農民主独裁の延長線上に「ブルジョア民主主義革命完遂のためのソビエト権力樹立」という路線だった。レーニンの『4 月テーゼ』はプロレタリア革命のうえに立った①コミュン国家の建設②土地の国有化③銀行と社会的生産・分配のソビエトによる統制などプロレタリア独裁とそのもとでの過渡期的政策を提起したのだった。いわば、「プロレタリア社会主義革命のためのソビエト権力樹立」という路線だ。

『4月テーゼ』の反応はどうだったのか？レーニンが孤立した。メンシェビキのボクダーノフは「まるでうわごとだ。…あんな駄弁を喝采するなんて恥辱だ」と憤怒と侮蔑を投げつけた。同じくメンシェビキのスコーベレフは、「彼は運動から離れていたのですっかり消耗しているのだ」と評した。元ボルシェビキ中央委員会のゴーリジェンベルクは「レーニンは革命的民主主義派のただなかに内乱の旗を押し立てた」と批判した。党内でもレーニンの演説を支持したのはコロンタイだけ一人だけだった。最も近いボルシェビキ党員たちでさえ判断停止状態に陥った。レーニンとともに亡命地で過ごし、「副官」を自任していたジノーヴィエフさえも沈黙に陥った。あまりにも孤立していたため敵階級からも危険視されたなかった。

その時レーニンの孤立は決定的だった。

日刊レーニン 27 号（4月8日）

100年前の本日のレーニン。レーニンが書いた「ルイ・ブラン主義」という短い論文が『プラウダ』27号に掲載された。ペトログラード労兵ソビエト執行部のチヘイゼ、ツレテリの小ブルジョア的立場を徹底的に批判した論文だ。さらに、「2重権力について」「戦術に関する手紙」という論文も執筆中だ。レーニンは『プラウダ』を通じて揺るぎない自分の確信を同志たちに注ぎ込む。

昨日の『プラウダ』26号には、「4月テーゼ」が掲載された。しかし、今日の『プラウダ』27号には、「4月テーゼ」をレーニンの「個人的な意見」にすぎないことを強調するカーメネフの文章も載せてある。内容はこうだ。「同志レーニンの一般的計画に関する限り、我々には受け入れ難いもののように思われる。なぜならば、それはブルジョア革命が完了したという仮定から出発して、この革命が直ちに社会主義革命に転化することを期待しているからである」

同日、ボルシェビキ・ペトログラード委員会はレーニンの「4テーゼ」を13対2（棄権1）で否決した。レーニンだけが生きた労働者と兵士の怒りと思いに向き合っていた。レーニンは、一般労働者・兵士のボリシェビキの依拠して闘いを開始した。

日刊レーニン号外（4月10日）

100年前の本日のレーニン。本日はレーニンの47才の誕生日だ。レーニン万歳！

日刊レーニン 28 号（4月12日）

100年前の本日のレーニン。レーニンは猛烈に筆を走らせる。レーニンは『プラウダ』を読む労働者、兵士に訴えるために書きに書いた。レーニンはこの間、『プラウダ』掲載するための論文である『2重権力状態について』『戦術に関する手紙』『資本家の恥知らずのうそ』『戦争と臨時政府』『「ルースカヤ・ヴォーリヤ」にならって』を書きあげ、小冊子『わが国の革命におけるプロレタリアートの任務（プロレタリア党の政綱草案）』

を完成させる。また、10日には、イズマイロフ連隊の集会で現在の情勢について演説した。レーニン、見据えるのは14日の労働者・兵士党員が参加するボルシェビキ・ペトログラート全市協議会だ。

日刊レーニン 29号（4月14日）

100年前の本日のレーニン。レーニンが書き上げた『嘘つき同盟』『銀行と大臣』『重要な暴露』が本日の『プラウダ』に掲載された。

さらに、今日は、ボルシェビキペトログラート全市協議会が開催された。レーニンは名誉議長に選ばれ、第一回会議で現在の情勢についての報告と討論における結語を述べた。

レーニンは討論の結語で「不一致は明らかに存在する」と真正面から認めた。しかし、この間の労働者・兵士での直接の訴えで4月テーゼの内容に確信を持った。討論でもレーニンへの支持は格段に増えた。レーニンは着実に全体を獲得し始める。

日刊レーニン 30号（4月19日）

100年前の本日のレーニン。今日は、ロシア社会民主労働党・ペトログラート全市協議会の第3回会議がおこなわれ、参加した。

14日の第1回会議の後の、15日、ロシア社会民主労働党・ペトログラート全市協議会の第二回会議では、レーニンが提案した「臨時政府にたいする態度について」の決議が、賛成33、反対6、保留2で採択された。カーメネフが修正動議として提案した臨時政府への「統制」、また「政府打倒をかかげないよう警告」は否決された。

レーニンはさらに踏み込んだ。今回の会議は労働者・兵士ソビエトに対する討論を推し進めるつもりだ。この時には、すでにレーニンの「4月テーゼ」が浸透しつつあり、労働者・兵士への工作→代議員の改選→ソビエトの革命化→ソビエト権力樹立という路線が確定されつつあった。17日には、臨時政府の意図、最も革命的な兵士を前線に送る臨時政府命令を拒否して、首都守備隊は全守備隊会議で部隊の移動を拒否した。“いつ戦争がおわるのか?!” ペトルグラートの雰囲気もケレンスキーやツェレテーリに対する不信・不満が充満していた。大衆は注意深くボルシェビキに耳を傾けるようになった。横目で警戒しながら。あるものは、半ば敵意を込めて、またあるものは信念の念をこめて。

第3回の議事がはじまる。しかし、ふいに知らせが届いた。18日、生まれたばかりの共和国ロシアを祝う労働者のメーデーにおいて、臨時政府のミュリコーフ外相は、各連合に公式の覚書を送っていたことが暴露された。帝政時代にむすばれた契約＝戦争の継続を忠実に履行する旨を伝えたというのだ。内容の結びはこうだ。「決定的勝利まで世界戦争を遂行しようという全国民的志向が強まっただけである」。

会議は中断された。臨時政府の戦争継続の意思！労働者の怒りが爆発するだろう！参

加者はデモ・ストライキの組織化、ペトログラートソビエトの緊急会議へ飛んで行った。会議の再開は 20 日、2 時だ。

\*付録：マルクス主義同盟理論機関誌『中核』 PV

<https://www.youtube.com/watch?v=0jkkxOHkohFs>

日刊レーニン 31 号（4 月 20 日）

100 年前の本日のレーニン。朝、レーニンは本部であるクシェシンスカヤ邸で中央委員会を開く。臨時政府の覚書に対して「ソビエトへの権力への移行」という決議を採択。ソビエト権力の樹立だけが戦争を終わらせることができる事を鮮明にさせた。

ペトログラートの街は上を下への大騒ぎだ。各紙新聞は、「覚書」を一斉に報じた。プラウダも「いよいよ爆弾が破裂した…ソビエト執行部の大多数による政策が破裂したことは明らかだ。我々が待ち受けるよりもはるかに早くやってきた。」というレーニンの論文を載せた。

工場や兵舎では集会が行われ、正午には「ミュリコフを打倒せよ」のプラカードや横断幕を持った労働者が続々とデモに出た。夕方には「臨時政府打倒」も現れた。

一方、ネフスキー通りは、紳士淑女の群れが練り歩いた。「臨時政府万歳」「ミュリコフ万歳」「レーニンを牢屋に入れろ」と叫ぶ。

午後 3 時には兵士の一団も登場する。フィンランド連隊の一団、予備隊の数個中隊、などが首府の大通りを行進する。どこに行くのかとの間に、彼らは臨時政府の閣僚を逮捕しに行くと言答する。すぐにソビエトチヘイゼ議長を頭とする代表団が派遣され、兵隊を説得し兵舎に送り返す。次々に労働者・兵士のデモ。それを送り返すソビエト執行部。その繰り返した。

午後 2 時にはペトログラート市協議会が再開。ソビエトにおけるボルシェビキの態度が議論され、ソビエトの内における「国際主義派」と「祖国防衛派」と対決構造が鮮明にさせられる。協議会は①集会を広範に開く。②臨時政府との協調政策を拒否するよう労兵の圧力を組織する一と賛成 10 反対 8 棄権 4 で決議した。さらに、朝の中央委員会の決議も賛成多数の 24

で承認した。だが、レーニン、ボルシェビキは今すぐ内乱や蜂起に訴える考えはなかった。

午後 7 時には労兵ソビエト総会が開かれた。ボルシェビキのヒョードロフは「ソビエトがなすべきことはこの内乱に乗じて権力を自己の手中に握る」ことを主張。ものすごい反響を受けるが、執行部提案で、政府との交渉になる。午後 10 時に始まったソビエト執行部と臨時政府の交渉では「覚書を受け入れることができない」とチヘイゼは発言するも結局は臨時政府に屈服し、政府が国民に覚書を解説することで妥協が成立した。

4 月の闘いはまだ続く。

日刊レーニン 32 号（4 月 24 日）

100 年前の本日のレーニン。本日から 29 日までロシア社会民主労働党（ボ）第 7 回全ロシア協議会がおこなわれた。この協議会は約 8 万の党員の代表である 151 人の代議員で行われた。レーニンにとっては 4 月テーゼで全党を再武装させる重要な協議会だった。午前中に第一回会議、午後に第二回会議が行われた。重要な論議はやはり、ペトログラート全市協議会と同様、4 月テーゼをめぐる問題であり、臨時政府、ソビエトに対する党の態度の問題だ。

会議がはじまる。レーニンは簡単なあいさつと現在の情勢についての総括的な報告をおこなった。臨時政府と戦争についての決議案が初めから議論になる。レーニンの決議案（ペトログラート全市協議会で採択された内容と同じ）に対して、カーメネフはまた臨時政府への「統制」を主張。さらに、他の代表たちから労働者への「説明」という活動方法について、「説明」以上の具体的戦術・行動が必要であるとの不満が出される。

レーニンは、特にミュリコーフの覚書に抗議する 20 日、21 日のデモを総括し、一部ボルシェビキの行き過ぎた武装デモ、「臨時政府打倒」のスローガンを掲げたことを時期尚早、冒険主義として組織違反と批判した。さらにカーメネフに答えて言う。「我々は少数派である。だが、それがどうしたと言うのか！ 排外主義にうかれているいまの時期には、社会主義者であるということは少数派であることを意味し、多数派であるということは排外主義者であることを意味するのだ」「道をふみはずして改良主義におちいってはならない。われわれが闘うのは、敗北者となるためではなくて、勝利者となるためである」。本日の会議は 23 時 45 分に閉会した。

日刊レーニン 33 号（4 月 25 日）

100 年前の本日のレーニン。今日は、午前に第 3 回会議、午後に第 4 回会議が行われる。

第 3 回会議では、ボルグビェルクの提案で国際社会主義平和会議への出席、派遣が提起される。レーニンはこれを社会排外主義者の会議として批判。代表を派遣しない事を提案。

第 3、4 回会議での各地方、ウラール、ペトログラート周辺、モスクワ管区の報告は重要だった。ウラールからはスヴェルドローフが報告。革命前に非合法活動が行われていた諸組織では、ソビエトよりも党組織が先に組織され、ソビエト内での党の影響が強いことが報告された。さらに、各地方の発言者からも、工場での生産に対する統制、または分配。8 時間労働の導入が労働者の実力、創意で行われていることが報告。地方では臨時政府よりソビエトがに権力を治めていた。レーニンはこれを最も重要な資料として評価。「革命は中央から始まり…地方に移りつつある」「中央もまた勝利するだろう」と締めくくった。

日刊レーニン 34 号（4 月 26 日）

100 年前の本日のレーニン。今日は、第 5 回会議がおこなわれた。引き続き地方の報告にあてられた。注目されたのは、モスクワ市組織の報告だ。この組織は「4 月危機」である 20、21 日の労働者の闘いを契機に急進化したことが報告された。また、全体としては、農業地域ではエスエルの影響が強いこと。トゥーラ、カルーガ、リャザーニ、タムボフなどの代表が出席していないことから、これらの諸県は党組織がたしかなものになっていないことが示された。

日刊レーニン 35 号（4 月 27 日）

100 年前の本日のレーニン。今日は、第 6 回会議が行われた。戦争についての決議案が提出される。この戦争が帝国主義戦争であること、ロシアにおける臨時政府の成立もこの戦争の性格を変えなかったこと、したがって、ボルシェビキはこの戦争も臨時政府も支持しないとされた。同時に、戦争を終わらせるためには、世界革命しかないことが明言される。この決議を反対 1、保留 6 をのぞく全員の賛成で採択された。

さらに、臨時政府についての決議案が提出され討論された。この決議では臨時政府の性格づけが行われ、その政策について批判された。さらに党の基本的任務として、民衆のあいだで長期にわたる活動、ソビエト内での全面的な活動と地方における労働者の自発的な行動を全面的に発展させ、組織し、強化する事を提起した。若干の修正ののち反対 3、保留 8 をのぞく全員の賛成で採択された。

レーニン、ここにおいて 4 月テーゼの基本的な内容において勝利していった。

日刊レーニン 36 号（5 月 2 日）

100 年前の本日のレーニン。レーニンは披露のあまり床に伏せている。全ロシア協議会をへて完全に疲れが出ているのだ。しかし、今日の『プラウダ』にもレーニンの論文『権力の危機』『フィンランドとロシア』が掲載され力強く臨時政府とソビエト執行委員会を批判する。

5 月 1 日には、ソビエト執行委員会は「4 月危機（4 月 19 日～21 日の労働者の闘い）」による権力の危機を打開するために、臨時政府との連立政権に加わることを賛成 41、反対 18、棄権 3 で決定した。反対したのは、ボリシェビキとメンシェビキの国際主義派だけだった。5 月 5 日にはペトログラート・ソビエトが行われる予定だ。ソビエト執行委員会は臨時政府を救済するためにそこでの承認を狙っていた。ペトログラードから離れたある地域では、ペトログラート・ソビエトの参加を目指していた人物がいた。4 月 30 日に釈放されたトロツキーだった。トロツキー、ペトログラートに向かう。

日刊レーニン 37 号（5 月 5 日）

5 月 5 日、ペトログラート・ソビエトが開かれた。ボルシェビキは『プラウダ』でレ

レーニンの論文『その前夜』を掲載して連立政権構想を批判した。しかし、連立政府の構成とその政治綱領は、ペトログラート・ソビエトによって承認された。ボルシェビキは連立に反対する票を 100 票しか獲得できなかった。ペトログラート・ソビエトは会議に登壇する大臣を熱烈に歓迎したが、同時に前日アメリカから帰国したばかりの、トロツキーも同じ嵐のような拍手で迎えた。トロツキーは連立政権は 2 重権力を解決しないと批判し、3 つの革命戒律を提起した。それは①ブルジョアジーを信用しないこと②指導者をコントロールすること③自分たちの力だけをあてにすることである。反応は冷やかだった。誰かが言った。「レーニンよりも悪質だ」。さらなる革命へ役者は揃った。

日刊レーニン 38 号（5 月 10 日）

100 年前の本日のレーニン。本日のレーニンは、「メジライオンツィ」の会議に出席した。国際主義の立場にたつ社会民主主義的グループや流派とボルシェビキ党の統合についての演説をおこなった。レーニンに手応えはあった。レーニンとトロツキーは急速に接近していく。

日刊レーニン 39 号（5 月 16 日）

100 年前の本日のレーニン。レーニンは『プラウダ』に 2 つの論文を掲載した。一つは「軽蔑すべきやり方」であり、2 つ目は「避けられない破局と法外な約束」という論文の第一論文（第二論文は明日掲載予定）だ。

ロシアでは「破局」の危機が誰の目から見ても鮮明になっている。ソビエト執行部が握っている機関紙『イズヴェスチア』は「信用機関の統制」「トラストの国有化」「投機の撲滅」「(資本家階級への) 労働義務制」が必要だと叫び始めた。カデットの新聞『レーチ』でさえもメンシェビキの大臣スコベレフが「有産階級に 100% 課税」「労働義務制」が必要だとか細く言い始めたことを掲載した。レーニンはそれが人気取りのから文句であることを知っている。しかし、誰もがそれしかないと思い始めている。レーニンはスコベレフの発言は「それが実際に実現される条件を理解していない」「(実際は) 仕事に着手したがる」と批判し、誰がこの「破局」を、どのように乗り切ることを実現するのか？を全労働者に『プラウダ』を通じて提起する。統制を実際に実現させる力は何か？それはプロレタリア民兵だ。レーニンはさらに明日の第 2 論文でさらに深く提起しようとする。

日刊レーニン 40 号（5 月 17 日）

100 年前の本日のレーニン。レーニンは本日の『プラウダ』に「避けられない破局と法外な約束」の第 2 論文を掲載した。レーニンは、スコベレフの「(資本家に) 100% の課税」「利潤を 100% 取り上げる」の意図を徹底的に弾劾する！「われわれには一時利潤がなくてもいい」「あらゆる過渡的状況を解体させ、それを労働者のせいにしてや

ろう」。これが資本家の狙いだと批判。資本家は資本主義的生産関係が維持されるなら「破局」しようが構わない！ということだ。

レーニンはこの状況に対して、「労働者は、実際の統制をただちに実現するように、しかもかならず労働者自身の手で実現するように要求しなければならない」とし、「破局」の時のもっとも必要な仕事は、「組織の仕事である。プロレタリア的組織性の奇跡」「大衆の組織性がなければ絶対に不可能である」「すべての階級から有能な組織者を登用しなければならない」と喝破する。

また、レーニンは、製管工場とその他の企業の労働者の集会に出かける。レーニンはそこで現在の情勢について演説した。12日にはプチロフ工場、海軍造船所、フランス＝ロシア工場、そしてその他の労働者集会でも同様に訴えてきた。レーニンは『プラウダ』だけでなく、直接自分の声でも労働者に訴える。労働者と生きた交通の中で、理論が大衆を捉え、大衆が理論を捉えていく。

日刊レーニン 41 号（5月 20 日）

100 年前のレーニン。本日は、小冊子『党綱領改正資料』の印刷準備に取り掛かり、その序文を書く。この『党綱領改正資料』はロシア社会民主労働党（ボ）中央委員会がレーニンに公刊を委託したものだ。レーニンは、公刊にあたってできるだけ多くの同志を積極的に参加させようとする。レーニンは「すべての同志党员諸君と、さらにすべての党同情者諸君にたいして、この資料を問う出版物のなかにできるだけ広範に再録し、全党員にそれを知らせるように、そしてありとあらゆる意見や草案を『プラウダ』編集局（ペトログラート・モイカ街 32 番地 中央委員会 行、綱領改正資料と表記すること）宛におくるように、お願いする」と序文を結んだ。

日刊レーニン 42 号（5月 21 日）

100 年前の本日のレーニン。レーニンは、スコロホード工場へ行く。「破局」に向かうロシア情勢とプロレタリアの方針について労働者に報告、訴えるためだ。また、ペトログラートのモスクワ・サズターヴァの企業前でも訴えるつもりだ。労働者統制、民兵の組織化の闘い、ボルシェビキの影響が現場の労働者の中で拡大、前進していく。

日刊レーニン 43 号（5月 25 日）

100 年前の本日のレーニン。レーニンは 5 月 30 日からおこなわれる工場委員会第 1 回ペトログラート会議の決議案である「崩壊との闘争の経済的諸方策についての決議」を書く。

レーニンは、ソビエト、労働者・労働組合内での党派間の力関係を変えるために、工場委員会を非常に重要視した。この決議案では労働者統制の担い手を工場委員会、労働組合、中央及び地方ソビエトであると明確にさせ、逃げ出さなかった企業家、技術者を統

制に参加させ、決定な機関内で労働者が必ず4分の3を占めるように提案した。さらに、営業帳簿、銀行帳簿を公開し、銀行、商工業の巨頭や大物の利潤、利得、財産の大部分を人民の手に引き渡すことをためらわないこと、言葉によってではなく行動で完全に無条件で信じさせる事が必要だと論じた。

レーニンが工場委員会ペトログラート会議の議長にスヴェルドロフを推した。

日刊レーニン 44号（5月30日）

100年前の本日のレーニン。レーニンは、ロシア社会民主労働党ペトログラート委員会の会議に出席した。レーニンは最近突如でてきた機関誌の問題について発言した。ペトログラート委員会が中央機関紙とは別個の地方機関紙を持ちたいと言うのだ。レーニンは反対した。西欧の首都、大工業中心地では中央機関紙と地方機関紙はわけられていないからだ。ペトログラートは地理的、政治的にも全ロシアの革命的中心地であり、ペトログラート委員会の運動は全ロシアの指導的な手本であり、一地方の運動と見なすわけにはいかなかった。レーニンは決議案を提出した。決議案では、別個の機関紙を認めず、ペトログラート委員会の中央機関紙の関与を強める案を提起した。

日刊レーニン 45号（5月31日）

100年前の本日のレーニン。本日のレーニンは、工場委員会第1回ペトログラート協議会に出席し、工業にたいする労働者統制の問題について演説した。崩壊との闘争についてのレーニンの決議が会議で採択された。また、レーニンは第1回全ロシア・ソビエト大会に出席するボルシェビキ代議員会議で、現在の情勢について演説した。第1回全ロシア・ソビエト大会の開催は6月3日に迫っていた。

日刊レーニン 46号（6月4日）

100年前の本日のレーニン。レーニンは第1回全ロシア労兵ソビエトに出席している。全ロシア労兵ソビエトは6月3日に開始され、初日は挨拶と祝辞についやされた。本日の4日は連立内閣に対する態度の審議に入る。

新たな大臣のツェレテリは新たな政府を熱烈にほめちぎった。「現在のロシアには、こちらに政権を引き渡せ、諸君は立ち去って、われわれに席を譲るがよい、と言える政党はありません。かのような政党は存在しないのであります」。すると、会場中央でしつかりとした声で「その政党は存在する」と野次る者がいる。もちろんレーニンだ。

いよいよレーニンが登場し演説する。「大臣さんはただ今、政府の職責を単独で果たせると言い切れる政党は、このロシアに存在しないと申されたが、私はその政党が存在するとお答えしておきます。いかなる政党も、政権の担当を拒むことはできない。もれわれも、これを拒みません。わが党はいついかなる場合にも政権をとる用意があります」

ボルシェビキは一斉に手をたたくが、その拍手は会場のどよめく笑いの渦にかき消さ

れる。

レーニンは「なんなりとお笑ください」と侮蔑の言葉を吐いてから、4月の会議で決定した政策プログラムを紹介し、経済危機の中で、資本家が軍需品であげた利益を批判した。最初は、ツェレテリにあざ笑うような目をすえて、親指をチョッキの脇にはさみながら、一語一語を力づけるように発言したが、最後には腕をふり、拳を震わせながら演説する。「あなたのように、民主大臣として資本家の政府にはべるくらいならば、めぼしい資本家を50人から100人も逮捕したまえ！…ただの数週間だけでも捕えておけば、国に数百万の損失をもたらし、これから先も日に日にもたらすであろう詐欺と陰謀のすべては、彼ら自身の口から明るみにでるだろう」。今度はだれも笑わなかった。

日刊レーニン 47号（6月8日）

100年前の本日。ボルシェビキ中央委員会、ペトログラート委員会、地区委員会と労組、工場代表者が合同会議を開き、6月10日にデモを決行する事を決定した。ボルシェビキ中央委員会、ペトログラート委員会、軍事組織のほかに、ペトログラートの工場委員会中央評議会と労組中央事務局執行部も、デモのアピールの主体として名を連ねた。

5～6月、大衆の雰囲気は変化してきた。ペトログラートとその周辺の工場委員会の代表者会議では、421票のうち335票がボルシェビキの決議案に賛成した。金属工組合の組合員数は約10万人に達し、1ヶ月で2倍に増え、組合内でのボルシェビキの影響は急速に増大した。ソビエトの部分的改選はすべてボルシェビキの勝利をもたらした。6月1日、モスクワ・ソビエトではメンシェビキ172人、エスエル110人に対して、ボルシェビキは早くも206人になっていた。党员数はたえず増えていった。4月末のペトログラートの組織は1万5千から、6月末には3万2000に達した。特に、資本家のロックアウトのおかげで、労働者は労働者統制の要求を受け入れやすくなった。工場委員会は、意図的にロックアウトしている資本家を摘発し操業を再開させた。労働者民警の指導権は工場委員会が掌握していた。

兵士の方でも怒りが渦巻いていた。新たな陸軍大臣であるケレンスキーが軍の規律を正そうとして、命令を次々にだし、ペトログラート守備兵の激しい反感を買った。

6月7日、ドオルノヴォーの別荘事件は労働者、兵士の怒りを買ったもつとも重要な事件だ。1905年革命を弾圧した内務大臣として名をはせたドオルノヴォーの別荘をヴィボルグ地区の労働者が占領し、使用していた。政府はその救済に乗り出し、立ち退き命令を出した。ツェレテリも拒否はしなかった。28の工場が抗議ストを宣言した。ボルシェビキも10日にデモを決行する決意をした。6月からさらに大きく歴史が動いていく。

日刊レーニン 48号（6月9日）

100 年前の本日。『プラウダ』の朝刊に 10 日のデモを呼びかけるアピールが掲載された！ボルシェビキのアジテーターが兵営と工場にデモの方針を訴えて回った。ボルシェビキ軍事組織の機関紙『ソルダーツカヤ・プラウダ』はデモの細かい指示を与えた。労働者街に張り巡らされたボルシェビキのポスターは「平和なデモの権利」を主張していた。工場や兵営では、「全権力をソビエトへ」のスローガンを掲げて街頭に登場しようという決議を続々とあげていた。労働者はボルシェビキをせきたて、兵士は沸き返っていた。メジライオンツィもトロツキーのはたらきかけでデモに合流することに決めた。

全ロシア労兵ソビエト大会では、レーニンが戦争を遂行する臨時政府打倒の方針を鮮明に演説した。ソビエト議長団は 15 時にデモの計画を知らされた。チヘイーゼは「大会が対策を講じないと、明日は致命的な日になる」と死人のような声で言い、大会議長団とペトログラート・ソビエト執行委員会事務局との合同会議を開き、対策を討議した。チヘイーゼらが起草したアピールは「革命的民主勢力の隊列における同士討ちを反革命家は貪欲に待ち望んでいる」「一個中隊、一個連隊、労働者グループといえども街頭に出てはならない」と命じ、「6 月 10～12 日の 3 日間にわたるペトログラートでのデモ禁止とデモ予防のための事務局設置をソビエト大会に提案することを決議した。9～10 日にかけての真夜中に再開されたソビエト大会は 3 日間のデモ禁止など議長団の提案をすべて採択した。約 500 人の大会代表をデモ中止のために工場・兵営に派遣した。

ボルシェビキ中央委員会は、レーニンの下、大会決定に対する会議を 10 日午前 2 時に招集する。

日刊レーニン 49 号（6 月 10 日）

100 年前の本日のレーニン。レーニンは 6 月 10 日午前 2 時にボルシェビキ中央委員会を開いた。ボルシェビキが追求したのは平和的なデモであり蜂起ではなかった。しかし、ソビエト大会のデモ禁止の決議に従わざるをえなかった。レーニンとスヴェルドローフは棄権し、スターリン、ジノーヴィエフ、カーネネフ、ノギーンが賛成してデモ中止を決定した。

ボルシェビキは臨時政府とメンシェビキ、エスエルに敗北したのだろうか？

ソビエト議長団は 500 人のソビエト大会代議員を派遣してデモ中止の決定を兵営・工場に伝え回り、兵士と労働者を説得した。

500 人の慰留班は不眠の夜のあと完全に意気消沈してタヴリーダ宮殿に戻ってきた。彼らは大会の権威は絶対であると信じていたが、不信と敵意の壁にぶつかった。「大衆の中ではボルシェビキが圧倒的に優位である」「メンシェビキやエスエルに対する態度は敵対的である」「『プラウダ』しか信じない」ここかしこで「われわれはお前さんたちの同志ではない」と叫ばれた。代議員たちはデモ中止を勝ち取ったにもかかわらず重大な敗北を喫した事を次々に報告した。

日刊レーニン 50 号（6 月 11 日）

100 年前の本日。11 日午後 5 時、ソビエト大会議長団、ペトログラート・ソビエト執行委員会、ソビエト大会各派事務局など約 100 人、全党派の指導者が集まって合同会議を開いた。

まず、メンシェビキのダンがボルシェビキの 6・10 デモ計画を「政治的冒険」と弾劾した。ツェレテーリはさらに右から批判する。「起きたことは陰謀以外の何ものでもない。政府転覆と…ボルシェビキによる権力奪取の陰謀である。…反革命は唯一の戸口、ボルシェビキを通過のみ我々のところに進入できる。…武器を自己の手に正しく持てない革命家からは、武器を取り上げなければならない。ボルシェビキを武装解除しなくてはならない」

ツェレテーリは君主主義反革命分子の陰謀を口実にしてデモを中止に追い込んだが、2 月革命以後は労働者、兵士の武装によって明確に維持されてきた。「ボルシェビキの武装解除」とは労働者と兵士の武装解除を意味していた。大会代表者たちは社会主義者としてこれに納得しかねた。ボルシェビキ代表団は抗議・退場した。トロツキーはボルシェビキの立場を擁護し、デモ計画を全面的に支持して、社会協調派の連立路線を厳しく攻撃した。メンシェビキ国際派のマルトフもツェレテーリの反革命を鋭く批判した。

レーニンは 11 日のボルシェビキ・ペトログラート委員会で「このとりやめは無条件に必要であった」と総括し、ツェレテーリの反革命性を弾劾し、平和的なデモさえ許されない情勢では「最大限の冷静、慎重、忍耐、組織性」が必要であり、「ブルジョア反革命に襲撃の口実を与えてはならない」と自重を促した。大衆は 10 日のデモ中止のボルシェビキの決定に従ったが、決して抗議や怒りなしに従ったわけではなかった。各地区のもっとも怒った労働者たちは、党員証を破り捨てた。

結局、社会協調派が労働者の武装解除を断念せねばならなかった。ソビエト代表団は思い知ったことは大衆の中でのボルシェビキが優位だった。しかし、この事は全人民的に明らかになっていなかった。隠然としたものが、公然となる一点が近づいていた。